

奈良女大人間文化 ○金 由美 奈良女大生活環境 中川早苗

【目的】在日韓国人は戦前・戦後日本に定着した日本社会のエスニック集団である。今回調査の対象としてとりあげた三世である在日韓国人青年は日本で生まれ育ち、日本の学校で日本人と同じ教育を受けている為に、母国である韓国を殆ど知らず、韓国語も話せず、日本文化と韓国文化のはざまにある境界人とも言える。本報では、今や日本が定着の地となり日本人化されつつある在日韓国人青年の民族服に対する意識をエスニック・アイデンティティとの関連を通じて考察することを目的とする。在日韓国人青年のエスニック・アイデンティティや民族服に対する意識の行方を探ることは、共存共栄を目指す21世紀、日本社会が在日韓国人を通して異文化を理解し、共に暮らす為に意義あることと思われる。【方法】大阪府、京都府、兵庫県に在住する満18才から30才未満の在日韓国人青年、およそ400名を対象に、1997年11月から1998年2月に質問紙調査を行った。エスニック・アイデンティティや民族服に対する意識について、単純集計やクロス集計をもとに平均値の差の検定、 $\chi^2$  検定を行った。【結果】エスニック・アイデンティティに関する項目では、できれば民族風の結婚式やチェサ（法事）を守りたい、韓国の文化や言葉を知りたい、次の世代にも民族教育を受けさせたいと思っている割合が高い。また民族服に対する意識については、和服は上品で美しく一回は着てみたいと憧れを持っているが、和服は日本民族のシンボルであり自分とは関係ないものであると答えた割合が高い。一方、韓服は民族の魂のシンボルとして関心を持っており、誇りや愛着が強く、エスニック・アイデンティティとの関連も高く、民族服はエスニック集団にとって、エスニックシンボルとして不可欠なものであることが明らかになった。